
[短編]甘い旋律

冴風あやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「短編」甘い旋律

【Nコード】

N8849Z

【作者名】

冴風あやか

【あらすじ】

*登場人物の名前も無い作品です。これだけ読んでもわかり難いかもしれません…

満月の夜、月明かりの下。

魔物は眠っていた赤い目を覚ます。

口の端に笑みを浮かべ、獲物を探し街を彷徨い歩く。

誰もそれが何かなんて気にはしない。

誰もそれが人外のものだとは疑いもしない。

行き交う誰もが互いに無関心な夜の街。

例えば人一人消えたところで誰も気付きはしない。

闇は全てを有耶無耶に。

「今晚は、あなたも一人？」

背後からの呼び掛けにそれは顔を歪め振り返った。

見ツケタ 今夜ノ食事

女はその表情の真意には気付かない。

ただ肯定の意として納得し、細く白い腕を絡ませる。

年も1つか2つほどの違いだろう。

だが、鼻に付くのはきつい香水の匂い。

女の匂い。

街の裏、今にも消えてしまいそうにいたり消えたりを繰り返す

街灯。

それは女をそこへ導いた。

「私はホテルがいいんだけど…ま、いいわ」

馬鹿な女は気付かない。

自分からねだるようにその首にまとわりつく。

「あら」

そこで目の前の瞳を覗き込む。

「あなた、目が赤く見えるわ」

人外の色。

「綺麗ね、あなたの綺麗な顔によく似合うわ」

けれど、彼女はどうかやらかラーコンタクトか何かと勘違いしたらしい。

昔なら誰もが騒いだらうに。

棲みやすい世だとそれは嘲笑を浮かべた。

それを合図と勘違いしたのか、女は唇を重ねていく。

「はあう…もつと…」

甘い声がそこに響く。

淫らに服をはだけさせ、恍惚と目を濡らした女が、壁にもたれかかるように、今にも落ちそうな身を支えていた。

口に自分の指を咥え、何かに耐えるように首を振る。

ぴちゃ…

厭らしい水音をたて、女の望む部分に一本指を沈める。

「ひあ…んっ」

びくつと身を震わせる女の姿にそれは顔を歪める。

「気持ちいい？」

耳元の甘ったるい、優しい声が女の鼓膜から脳に直接、刺激を送る。

「んっ…う、ん」

声にならない声。

女の口元は厭らしく開かれて、透明な液体が垂れていた。

「そんなにいいの？」

耳元でくすぐすと笑いながら指を、また一本増やしてやる。

大きくなる卑猥な水音が響くように女の耳に入る。

「っ…やあああ…！」

耐え切れず、女は腰を震わせその場に果てた。

ずるずると壁を滑るようにその場にしゃがみこみ、大きく肩を上
下させ、荒くなった息を調整する。

ぼうつと翻弄された意識と、涙でぼやける視界。

少し顔を上げ、目の前の少年に目を移す。

「くす、お姉さん、こんなにしちやったね」

目の前で、先ほどまで自分の中で動いていた長い指。

そこに光っているのは、自分の中から溢れ出した透明な粘液。
かぁ。

女は自分の顔に血が上るのを感じる。

「や、やめて…悪趣味よ…」

「そう？でも、事実だ。折角だし舐めて見る？お姉さんの、自分の
味…」

少年は、女の前に腰を下ろし、指を一本啜えさせる。

「なっ…」

声を出そうにも、女の言葉はそれ以上出なかった。

先ほど自分の中で好き勝手動いていた指が、今度は自分の中で動
く。

口いっぱいになった唾液が、口の端から滴り落ちていく。

「厭らしいな…まだ処女なのに」

女の目が大きく見開くと、少年は指を抜いた。

抜いた先に糸が引く。

「な、んで…？」

「一生懸命背伸びして、気づいてないと思った？」

歪んだ笑い顔。

その時になって、初めて女は目の前の少年に恐怖を感じた。

「俺を誘ったのは早く捨てたかったから？勿体ないね」

そう言っ、目の前の少年は、女の肩に手を伸ばす。

女は少年の一言一動を凝視する。

少年の長い指が、女の長い髪をくるくると弄ぶように動く。

近くにある顔。

女はもう一度少年の顔を覗きこむ。

先ほどよりも赤みを増した目が、闇夜に光るように浮かんでいる。

「あ、なた…な…に…その目…」

女は後悔に身体を震わせはじめた。

それは、コンタクトで作った目なんかじゃない。

本物の赤い目。

言葉が喉を纏わりつく。

今すぐ立って逃げ出したいのに、先ほど翻弄された身体は、まだ言うことを聞きそうにない。

情けなく抜けた腰。震える身体。

そんな女の様子に、目の前の少年は、楽しそうに笑った。

「綺麗な目って褒めてくれたよね。何か勘違いしているみたいだったけど、これは本物だよ」

「ほん…もの…?」

「そう。本物」

屈託のない、まるでクラスメイトと談笑するときに見せるような子供の笑い方。

逃げられないことを知っていて、目の前でしゃがんで女を見ている。

「俺は吸血鬼だからね」

「きゅ…けつき…?」

「簡単な知識くらいは知ってるだろ?ただ、世の中で思われているようなのは俺たちの先祖。現代の吸血鬼は、少しずつ人間と交わり、順応してきた。だから、人間社会でも普通に生活できる。」

馬鹿げてる。

そう言い退けたいのに、目の前の少年を見ると、それが嘘ではないと感じてしまう。

「でも」

そこで、少年の目が怪しく光る。

「満月の夜は身体が血を求める。悲しい性」
ちつとも悲しそうじゃない。

目の前の少年は笑っているのだから。

「今日、俺が何で誘いにのったか分かる？」

「なんで…」

「処女だったから」

「…」

「吸血鬼の好物は処女の生き血。それは今も昔も変わらない」

そう言つて、少年は顔を女の首元に埋めていく。

「初めから分かっていたよ。あんたからは処女の匂いがしてたから」

「い、いやあつ！化け物！」

「…うん？その化け物に翻弄されていたのは誰？」

「やめてっ！近寄らないで！」

女は必死で懇願する。

吸血鬼なんか、現代冗談みたいな話し。

けれど、目の前の少年は明らかにおかしいのが分かる。

「だめ。散々楽しませてやっただろ？」

暴れかけた女の手首を、少年はいとも簡単に押さえ込んだ。

壁に縫い付けられるように押さえられた手首に走った切ったような痛み。

女は手首を見て、ぎよっとする。

少年の爪が、伸びていた。

「俺たち吸血鬼は、覚醒するほど本来の姿に近づくんだけ。ほら、暗いから分からないだろうけど、髪も赤くなってる」

がたがたと女の身体が震える。

唇が震え、声が上手く出てこない。

「なんでこんなに今から居なくなる人間にこんな面倒な説明したか分かる？」

少年は、女に微笑んだ。

「怯えた顔が好きだから。　　ジャ、イタダキマス」

「ひっ…！」

少年は、はだけた胸元を一舐めし、伸びた牙を立てた。
白い乳房に、赤い血がぷつと浮かぶ。

途端、女はこの夜のものとは思えない快楽に襲われた。

恐怖であるはずのその行為は、女の身体に先ほど以上の快楽を送り込む。

女の命が途切れたのと、絶頂を迎えたのは、ほぼ同時だった。

ことぎれた女の身体をそこに捨て、少年は身を起こした。

「ご馳走様」

女を見る少年の表情に、もう笑いはなかった。

ただ、恍惚の表情で果てた残骸に一瞥を送り、再び闇の中に姿を消していく。

静かに闇に溶けていく…。

この時、少年すら気づいていなかった。

そこに居た、もう一つの気配に。

その気配は、事の始終を見ていた。

少年よりも残忍な瞳の持ち主は、街頭の下、捨てられた屍体に足をかけ口を開く。

「くすくす、見つけた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8849z/>

[短編]甘い旋律

2011年12月27日21時47分発行